はじめに

この出版の動機は、二〇一八（平成三〇）年五月に兵庫県内社協・共募事務局職員退職者会（通称「トアロード会」）で、会員有志による『地域福祉への挑戦者たち』を出版したことの反響に刺激されたことによる。

社協は、ご存知のように一九五一（昭和二六）年以降に発足した。同年に制定された社会福祉事業法に社協が法定化された。その法定化は中央社協（現在の「全社協」）、都道府県社協のみであり、市町村社協の法定化は遅れること三二年後の一九八三（昭和五八）年であった。

全社協は、一九六三（昭和三八）年、社協の憲法ともいうべき基本要項を発表した。この基本要項には、社協の活動は「住民主体」で推進することを宣言した。

当時、住民主体やサービス利用者主体、当事者主体といったような概念が社会福祉界には希薄であったことは確かだった。そんな時に果然と住民主体をうたい上げた基本要項は、社協の根本理念を指し示す羅針盤として輝いた。その後、基本要項は数次の改定を重ねたが、初期のこの基本要項の輝きは薄れることはなかった。

さて、この出版では、そのタイトルを『社協舞台の演出者たち』と付けた意味はこの住民主体の原則と深くかかわる。基本要項発表当時は、社会福祉方法論の一つであるコミュニティオーガニゼーション論に基づいて地域福祉の推進者をコミュニティオーガナイザーと称していた。彼らコミュニティオーガナイザーは、地域福祉を進めるにあたって住民主体をどのように活かすかに苦慮しながら、あるいは、常に自己に問いかけながら進めたと考えられる。私にしてそうであった。私が得た結論は、コミュニティオーガナイザーは決して表舞台で主役を演じてはならないということであった。主役を演じるのは地域住民であり、当事者であり、社協であれば、役員でなければならないと結論付けた。コミュニティオーガナイザーは常に住民や当事者が主役を演じられるよう、あるいは社協構成員の代表である理事が主体的に問題を提起しその解決の方向を探っていくことができるようプロデュースする演出者であるべきだという思い、もっと強く言えば信念のようなものをもって臨んできたと思う。ここに執筆して下さった皆さんは、社協のどの部分の仕事に関わろうと、そのために表現方法や住民主体を実体化するアプローチの方法は違っても、根底の思いは同じくする同志と考えている。こうした思いをぶつけてほしいと強く望んだし、それが反映したものとなったのではないかと自画自賛している。

この自画自賛のままで世に出すことにいささかの躊躇いもあり、客観的・科学的に評価していただくため、同志社大学名誉教授の井岡勉先生に総合的なコメントを依頼した。

井岡先生は私たちが紅顔の美青年であったころからの友人であり、私にとっては恩師の一人でもある。厳しい、しかも辛い切り口でのコメントを期待するものである。

二〇一九年八月　吉日

塚口　伍喜夫

社協舞台の演出者たち

目　次

はじめに……塚口　伍喜夫……*i*

第1部　道府県社協の部

第1章　「地域福祉活動の実践と教訓」――道社協三四年の足跡から――……岡部　和夫……*2*

1　生い立ち　*2*
2　「福祉学」への誘い　*7*
3　道社協の活動を足場に　*21*
4　地域福祉へのアプローチ　*33*
むすびに　*47*

第2章　社協まみれ……間　哲朗……*50*

はじめに　*50*
1　社協に就職するまで　*50*
2　社協で自分が刻んだと思える足跡　*54*
3　振り返って　*79*

第3章　社協自律を追求して……塚口　伍喜夫……*82*

1　塚口伍喜夫の成育歴　*82*
2　兵庫県社協への就職・活動　*87*

3　社協の在り方の模索と労働組合の結成　90
4　社協理論の学習と実践　92
5　自らは社協活動の「どこに」力を注いだのか　94
6　自己評価　105

第4章　私の社協人生を振り返る――自負の念・自責の念――……明路　咲子……107
1　兵庫県社協入局まで　107
2　地域福祉の世界へ　111
3　情報の重要性と難解さを痛感　117
4　思いがけず踏み込んだ世界ではあるが　130

第2部　政令指定都市社協の部

第1章　政令指定都市社協および区社協をめぐって……坂下　達男……146
1　雪国の山村で生まれ育ち都会へ――私のおいたち――　146
2　神戸市の社会福祉協議会へ　151
3　神戸市社協での私の担当した業務　154
4　政令指定都市社協および区社協をめぐって――私の取組みから――　159
5　社協でやり残したこと　169

6　わが社協人生を省みる　172

第2章　社協らしさを求め続けて……堀田　稔……177

1　私の生い立ち　177
2　社協マンとなる　180
3　住民主体を具現化する営み　182
4　社協に刻んだ小さな足跡　185
5　社協でやり残したこと　196
6　我が社協人生を振り返って　199

第3部　市町社協の部

第1章　地域住民と共に確かな一歩前を目指して……中野　孝士……206

1　社会福祉への胎動　206
2　社協活動への第一歩　207
3　社協で歩き続けた足跡　208
4　熱い思いを込めて創造した行政とのパートナーシップの構築と発展　215
5　後輩へのバトンタッチ　222
6　生涯をかけた仕事を終えて　223

第2章　社協の出会い、そして今……岡野　英一……225
1　福岡で生まれ育ち、京都で暮らす　225
2　私と社協の出会い　226
3　社協で自分が刻んだと思える足跡　229
4　社協でやりのこしたと思うこと――社協の財政的課題と人材の養成――　236
5　社協に人生をかけたことへの自己評価　238

第3章　住民主体の協議体を担保する社協マネジメント……佐藤　寿一……240
はじめに　240
1　就職、そして転職　241
2　計画に基づく実践の展開と組織マネジメント　242
3　住民主体の協議体をいかに担保するのか　社協マネジメントの在り方　249
4　地域福祉の政策化の中での社協マネジメント　252
5　おわりに　外人部隊の立ち位置から思うこと　253

第4章　舞台を創るので一緒に踊ろうや！……影石　公昭……254
1　プロフィール　254
2　社協との出会い　257
3　しあわせ実現の宝石箱　264

4　自分を支え育ててくれた仲間　268

第5章　社協に魅了された一人として……川﨑　順子……270
1　与えられた環境から　270
2　社協入局のきっかけは「地域保健福祉計画」策定から　271
3　町職員でありながら社協職員として　272
4　在宅福祉サービスの充実と地域福祉推進事業に関わって　273
5　社協でやり残したこと　279
6　社協に人生をかけたことへの自己評価　281

第4部『社協舞台の演出者たち』の読後コメント―総括に代えて……井岡　勉……283

編集後記……明路　咲子……438

執筆者プロフィール……441

第1部　道府県社協の部

第1章　「地域福祉活動の実践と教訓」
―道社協三四年の足跡から―

岡部和夫

1　生い立ち

(1)　広い北海道と風土

いま、北海道は「北海道」命名一五〇年の記念行事ににぎわいを見せている。「北海道」という名は一八六九（明治二）年に松浦武四郎開拓使史が提案した六つの中から名指しされ「命名」されたと聞く。彼はアイヌ文化と厳しい気候風土に学び、北海道の開拓を夢みた。そして先住民族の開拓の時代から戦後の開発、フロンティア精神が脈々と受け継がれてきた。また北海道は広大な土地、すぐれた自然に恵まれ心意気も高い。一九八七（昭和六二）年、道は「新しい開拓の時代」ととらえ、新しい北海道を創造した。豊かな自然のみならず自ら創意工夫する地域社会の創造を求めた。また北海道の厳しさは、北海道家庭学校（遠軽町・児童養護施設兼学校）に垣間見ることができる。同校の礼拝堂には「難有」という二文字が掲げられている。難有という二文

字は「ありがたし」と呼んでいるが、創始者留岡幸助先生は感謝すべき本当の意味は難儀があるということ。厳しい気候風土や暮らしという難儀があるから人々は助け合い、成長し、感謝する。しかも自然が人間に与える感化、影響、慰謝は計り知れない。北海道という厳しい風土の中で、なお住民は「自分のまちに住み続けたい」「ふるさとに暮らし続けたい」と願う。地域における住民の創造性や主体性は、住民自身の考え方を尊重すること。そのうえで住民の願いに応え、支え合っていくこと。そして人と人との信頼関係が地域という「場」において築かれていくということを教わった。

(2)　減少する市町村人口

一九六七(昭和四二)年、私が札幌に赴任した時、道内には二九市一八八町村、約五六〇数万人が住んでいた。二〇一八(平成三〇)年の現在、三五市一四四町村。人口は減少傾向を示す五三二万人。半世紀過ぎて二八万人が減少している。ひろい北海道の中で人々は札幌およびその周辺都市に集中し、過密化と過疎化が同時並行的に現れている。さらに高齢者人口が五〇%を超えると「限界集落」と心配され、近い将来人々が暮らす地域社会の存続が危ぶまれている。

入局して間もなく上司からまず道内の「市町村の名前を覚え、その特質を調べろ」と指南された。考えてみればこんな多くの市町村がある県はどこにもないのだ。覚えることに少し必死に

なったことを記憶している。

しかし道内自治体の人口減少問題はまさに地域社会の生活機能のマヒ、崩壊を示唆しているようにみえる。

北海道地域は広大である。札幌から函館までＪＲで四時間半かかっていた。釧路まで五時間、根室まで七時間を要した。稚内も同じく七時間費やした。したがって出張する場合、前日の午後一〇時頃の列車に乗り、いわば夜行列車で現地に赴き、その日の夜行列車で帰途に着くこともたびたびあった。逆に遠くの地域の人々にとっても同じことが言えた。現在は当時より三〇分ないしは一時間ほど短縮しているが、交通事故も多く移動手段にかかる苦労話が多い。

また雪害、水害等による住民生活の辛苦は大きく、特に孤立になりがちな高齢者等の除排雪、通院、買い物、入浴などその生活苦悩は今なお増え続けている。

(3)　洞爺湖町で生まれる

一九四一（昭和一六）年といえば太平洋戦争開戦の年である。私は同年九月にこの世に顔を出した。

洞爺湖町はかつて虻田町といわれ、人口一万人程の小さなまちである。風光明媚な世界で最も美しいといわれる湖と温泉があり、周りには昭和新山、有珠山、そしてジオパークに指定された

地域をもつ。有珠山は一九七七（昭和五二）年、二〇〇〇（平成一二）年など過去三度に亘り噴火があり、二〇～三〇年に一度は噴火期を迎えると警戒されている。噴火災害には多くの教訓を残しているが二〇〇〇（平成一二）年の時は国道二三〇号線（札幌から虻田）の西山地域で噴火しながら死者一人出さなかったことが評価されている。それは過去の教訓から災害に対する町内会や住民の意識の高さが挙げられる。自治体をはじめ住民相互の学習と協働、情報伝達の仕組みが徹底していたといわれる。特に地震・災害等の研究機関、地元自治体と常に連携していたことが災害を最小限にとどめたと語られている。

私の父（昌夫）のルーツを探ると、かつて祖父兄弟は徳島県阿南に住んでいた。北海道へ移住してきたのは一八九一（明治二四）年、屯田騎兵隊を志願したことから沼貝村美唄に入植したという。祖父らの生活記録によると「当時は喬木繁茂し熊笹密生、日中熊の出没することあり甚だ危険なり。大木、熊笹を刈り速成、開墾した」と記されている。現在の美唄市にあたるが緑の田園風景が美しい町となっている。父は一九二九（昭和四）年美唄から現在の洞爺湖町に移り、冬の生活には欠かせない石炭や木炭などを販売する燃料店を営み、母は布団、洋品などの呉服店を経営していた。人の身体を暖かく包む商売だった。

そのような町で小・中学を過ごす。小学校に通う途中に［白井坂］と言われる坂（石碑）がある。これはかつて小学校の校長先生であった「白井柳治郎先生」を町民の誇る人物として命名さ